

# 失語症リハビリ教室の参加者、家族及びボランティアへの効果について

○<sup>はないえ</sup>花家 <sup>かおる</sup> 薫 山川 正信 (大阪教育大学・院・健康科学専攻)

【はじめに】高齢社会では継続した言語訓練が必要な在宅療養者のうちの 30～47%で継続できていない。そこで、S 市で H13 年から実施している失語症リハビリ教室参加者について、在宅療養における生活実態や社会参加の結果で得られた活動性の改善や変化と関連する要因を明らかにすることを目的とした。

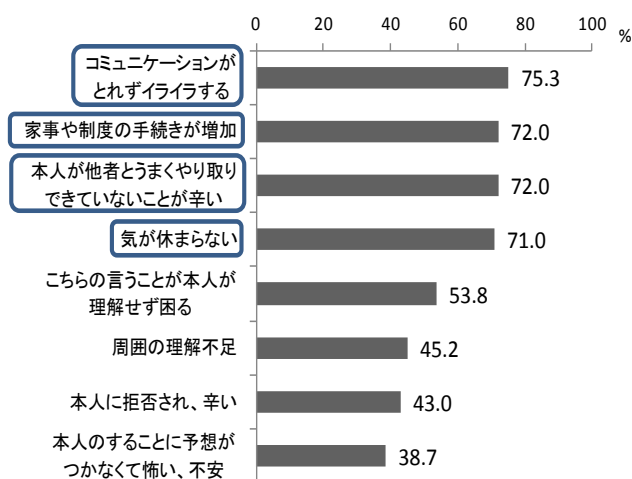
【対象・方法】参加者及びその家族、ボランティアに自記式質問紙による意識調査を実施し、教室に参加経験のある 98 名を対象に分析を行った。参加態度や変化を指標に、教室への家族同席、参加の自主性、発言意欲、ボランティアがいる安心感等の検討を行った。

【結果】自主的な参加者の機能改善効果が高いことが分かった。家族が同席しない者には、自主的参加や必ず発言するという積極的行動が多くみられた。自主的参加者で家族が同席しない者では、生活の中で自分のできることはするが有意に高かった。

教室の患者家族への効果について、家族 93 名の分析を行ったところ、被介護者に言語障害のある家族の介護負担感では「コミュニケーションが取れずイライラする」「家事や制度の手続きが増加」「本人が他も者とうまくやりとりできないことがつらい」「気が休まらない」の 4 項目が 70%を超えていた。

先行研究の在宅失語症者家族の調査よりも 20%低かったが、失語症のない要介護者家族との比較では 20%高いことが分かった。言語障害が長期にわたって継続する家族は精神的負担感を感じている。家族が教室に参加し、家族自身も交流を通じて他の家族の工夫を知り、本人の症状が分かりやすくなるといった効果を得ていた。精神的負担の有無に関わらず、家族同席の方が参加後の変化が高かった。

教室支援ボランティアの意識からみた育成方法について、半年以上の経験を有するボランティア 45 名の分析を行ったところ、コミュニケーションにおける困難感をもつ者は精神的負担が多かった。精神的負担、身体的負担、時



被介護者に言語障害のある家族の介護負担感

間的負担は、女性、60 歳以上、経験年数が 1 年以上の者で、困難感を有する者が有意に高かった。地域活動が重要と考える者は、困難感がない者に有意に多かった。

【まとめ】失語症者にはボランティアから安心感、家族の同席で自主的な気持ちを促すことで、言語機能の改善や自分でできることはする効果につながる。家族は情報交換や相談できる安心感から、集団で本人の症状が分かりやすい、負担感の軽減につながる。ボランティアは、地域活動は大切、失語症理解が支援になる、新しい知識を得るといったやりがいにつながっていることが明らかになった。

今後の教室は、地域住民主体の教室として、言語機能の改善や生活への積極性や自主性を促すこと、地域で失語症者、家族、ボランティアが一体的に関わり、地域全体に良い効果のある失語症者支援の仕組みづくり、まだ把握されていない失語症者や未発症者へ啓発活動の地域展開できる。失語症者や家族、ボランティアをつなぐ仕組みづくり、ボランティアへの助言が必要であると考えられる。

## 【連絡先】

花家 薫 (大阪教育大学・院・健康科学専攻)  
E-mail : [d109714@ex.osaka-kyoiku.ac.jp](mailto:d109714@ex.osaka-kyoiku.ac.jp)